様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０１０３７

研究課題名（和文）沖縄における祭祀と伝統的地理観の統合分析を利用した村の空間構造解析

研究課題名（英文）Analysis of village spatial structure using rituals and traditional geographical views in Okinawa

研究代表者
松井　幸一（Matsui, Koichi）

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：４０６１２４３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では主にに3つの成果があった。①今帰仁城旧集落でのドローンによるレーザー測量では、旧集落の周縁部に聖地が存在しグスク時代の旧集落においても周縁部を外界とする世界観が存在することを示した。②謝名集落での祭祀史料の分析では，聖地の名前，村をまたぐ聖地と祭祀者の存在から広域的な祭祀空間が明らかになり，祭祀記録の分析が集落構造解明の一助となることを示した。③謝名集落での聞き取り調査からは，集合的記憶からかつての景観を復原できることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究ではこれまで個別に扱われることの多かった祭祀と伝統的地理観に関する分析を，結合分析することによって，これまでとは異なる新たな視点から集落研究がおこなえることを示した。
琉球の地方集落において景観や祭祀は時代を経るにしたがい変化し、かつての姿は失われている。祭祀と景観の基盤となる伝統的地理観を組み合わせることによって得られる分析成果は、集落が形成された当時の空間がいかに構成されていたかを知ることに繋がり、住民の郷土意識醸成の一助になると考える。

研究成果の概要（英文）：There were three main results of this study. (1) Laser surveying using a drone at the old village of Nakijinjo showed the existence of sacred sites on the periphery of the old village and the existence of a worldview that considers the periphery of the old village as the outer world in the Gusuku period. The analysis of ritual records in jyana village revealed a wide-area ritual space based on the names of sacred sites, the existence of sacred sites and priest across the village, and showed that the analysis of ritual records can help to clarify the village structure. The interview survey in jyana village showed that it is possible to reconstruct the former landscape based on collective memory.
The present study shows that the integrated analysis of rituals and traditional geographical views is effective for the study of settlements from a new perspective.

研究分野：歴史地理学

キーワード：琉球　集落　風水　祭祀

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は琉球の村落を対象として、琉球の村落祭祀と「伝統的地理観」がいかに空間構造の基盤となっているかを明らかにするものである。これまで伝統的な祭祀がノロと呼ばれるシャーマンを中心に特定の家系出自の神官でおこなわれることは明らかにされてきたが、ノロを中心とした神官一族が村落の空間構造においていかなる意味を持つのかは未だ不明な点が多い。また村落形成の基盤として風水思想や「抱護」と呼ばれる考え方（本研究では「伝統的地理観と呼ぶ」）によって村落が造られてきたことは知られるが、「伝統的地理観」の表象でもある防風林としての村囲いや屋敷囲い、悪気を防ぐと云われる自然石設置などが実際にどのように村の空間構造や景観において考慮されたのかを広範囲に明らかにしたものはない。そこで本研究では、祭祀と「伝統的な地理観」が村の形成基盤において最も重要視されていたと仮定し、これまで地理学的分析に十分に活用されることのなかった祭祀の活動記録（祝詞の文言や座位置分布など）や神官一族の家系図を利用し、文脈に現れる地理的表現の分析、系図にみられる宗家・分家分析を通して、祭祀と神官の居住地に空間的な関係を見いだす。さらに GIS を活用して思想に基づく村囲いや屋敷囲い、信仰の対象となる自然石の設置箇所と住民属性、土地属性を結びつけ「可視化」し、祭祀と「伝統的地理観」がいかに村落の基盤となっているかを検証する。

２．研究の目的

本研究は「村立て」からその後の風水思想の導入による変容までを、祭祀にたずさわる神官の分析と風水思想の表象である村囲いや屋敷囲い、さらには「抱護」の思想から実証的に分析し、琉球村落の基盤にある本質的な空間構造を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究では祭祀と「伝統的地理観」が村の形成基盤において最も重要視されていたと仮定した上で、段階を踏みながら研究をおこない、村の空間を多角的に明らかにしていく。

(A)比較的戦災を免れた沖縄本島の北部地域から、風水に基づく村移動や合併事例を選定する。選定範囲は王府時代の行政域である羽地間切と今帰仁間切を対象とし、史書『球陽』の風水記述から判断する。記述内容は家や植生、方角など全ての項目ごとにデータベース化をおこなう。また選定した村の現在の地図、地籍図、民俗地図（現存する村のみ）をデジタル化し、幾何補正しながら GIS 上で地図データベースを作成する。この段階で風水思想に基づいて設計された湾曲街路の特定と分布、最大湾曲率も確認しておく。

（B）選定した村の一筆ごとの土地条件（土地利用、地筆面積、かつての田畑の階級など）や自然的環境（標高、河川流量など）を地図データベースに入力し、土地環境を復原する。この段階で時代によって拡大・縮小した村の範囲を特定し、時代別に村空間の分析が可能なようにしておく。

（C）祭祀組織としての社会集団について、神官および祭祀に参加する区長に聞き取りをおこなう。聞き取りでは参加する神官職名、祭祀の際の座位置、祝詞について聞き取り、祭祀ごとにデータベース化する。また神官の出自宗家を神官職名ごとに、家の屋号、家系図、位牌に記された記述からたどり、後継者不在の神官職まで整理する。それをもとに区長を中心とした住民に聞き取りをおこない、神官職の宗家、分家の位置を特定し、神官データベースとして整理する。血縁集団としての宗家・分家関係について、村ごとの『字誌』や聞き取りからその位置関係や属性を調査する。また王府時代の役職としての屋号を『字誌』から確認し、その宗家位置を特定する。分担者は血族と姻族について調査をおこない、神官を継承する人と祭祀集団上の役職について統計的分析をおこない、社会集団としての祭祀集団の意味を検証する。

（D）風水思想の表象としての景観要素について、村抱護・屋敷抱護としての植生分布、魔除け石「石敢當」の分布を調査する。調査では設置している人の属性まで聞き取り、思想の拡がりを分析可能にする。また生活景観要素として井戸や樋などの湧水と、それらごとの利用実態（生活井戸、共同井戸、聖地など）を調査し図示できるようにする。

（E）複数のデータベースを空間をキーとして結合し、祭祀と「伝統的地理観」について、村の形成基盤としていかに活用されていたかを明らかにする。

以上のように、本研究ではこれまで単一的視点からおこなわれてきた村の空間構造分析を、祭祀と「伝統的地理観」という村の思想的、生活的に基盤となりえる多角的視点から具体的に検証していく。その先にはこれまで伝承として、あるいは史書に移動や合併したというわずかな記述しか残らない琉球の伝統的村落が何を指向していのか、その核心的空間ともいえる村の原点はどのような役割をもっていたかを明らかにすることを目指す。これまでの琉球の村落研究が各要素の特徴的な面を強調するのに対して、本研究ではより大きな思想・生活・景観の統合という視点から村空間の分析を図っている。

４．研究成果

本研究はコロナの感染拡大期と重なったため当初の予定を一部変更し、住民と接触の機会の

多い現村の調査とともに旧村の調査をあわせておこなった。

旧村部の調査は図１の研究フローによっておこない、その成果は以下のとおりである（図１）。

（1）UAV レーザー測量の実施

旧村部にて UAV レーザー測量を実施し、CS 立体図の作成をおこなった。調査対象地は木々が生い茂る原野であったが、UAV レーザー測量にて精密な座標値を取得でき、その成果から CS 立体図を作成した。また CS 立体図から複数の石積遺構が存在することが確認され、原野部において UAV レーザー測量が有効であることが示された。

（2）絵図・テキスト分析の実施

土地整理期の絵図を分析することによって、現在は利用されていない祭祀空間があることを確認した。調査対象地である旧今帰仁集落・旧親泊集落ともに祭祀空間は広範に分布しており、両集落の一体的な祭祀の実態を示した。史書『琉球国由来記』の分析からは祭祀ルートが判明し、史書を用いた祭祀空間の分析が可能であることを示した。

（3）聖地「流レ庭」の発見

レーザー測量の成果から確認できた石積遺構は絵図・テキスト分析、フィールドワークから聖地「流レ庭」であることが判明した。「流レ庭」の上部にはさらに人工的に平坦な区画が整備されており、複数の祭祀者による祭祀空間としての利用が推測された。

（4）地表面モデル構築と可視領域分析

「流レ庭」の祭祀空間を基点にレーザー測量の成果から作成した地表面モデルから可視領域分析をおこなった結果、「流レ庭」からは海岸線が見渡せることが明らかになった。この成果と史書『琉球国由来記』記載の祭祀記録を組み合わせると、「流レ庭」は神送りの場所として利用されていたことが推測された。

（5）旧村における空間構造

「流レ庭」は旧村の周縁部にあたる場所にあり、これは村武が指摘する琉球社会の社会的・象徴的秩序の同心円的世界観に一致する。すなわち旧村においても祭祀空間認識として外部を他界として捉えており，計画性もしくは一定の秩序によって空間構成がおこなわれていたといえる。

現存の謝名集落における成果は以下のとおりである。

（1）集合的記憶の構築

高齢者に対するグループインタビュー調査から謝名集落の集合的記憶を構築した。集合的記憶からは集落には少なくなったという風水景観を復原することが可能であった。

（2）聖地の機能性の検討

集合的記憶をもとにした景観復原の成果と祭祀、豊年祭の分析からは、アサギと呼ばれる聖地がかつては祭祀空間として住民同士を繋いでいたが、現在は祭祀の縮小にともなってその役割が小さくなっていることを示した。その一方で現在のアサギは豊年祭の主舞台として利用されており、住民同士を繋ぐという空間の機能性においては変化していないことが明らかとなった。

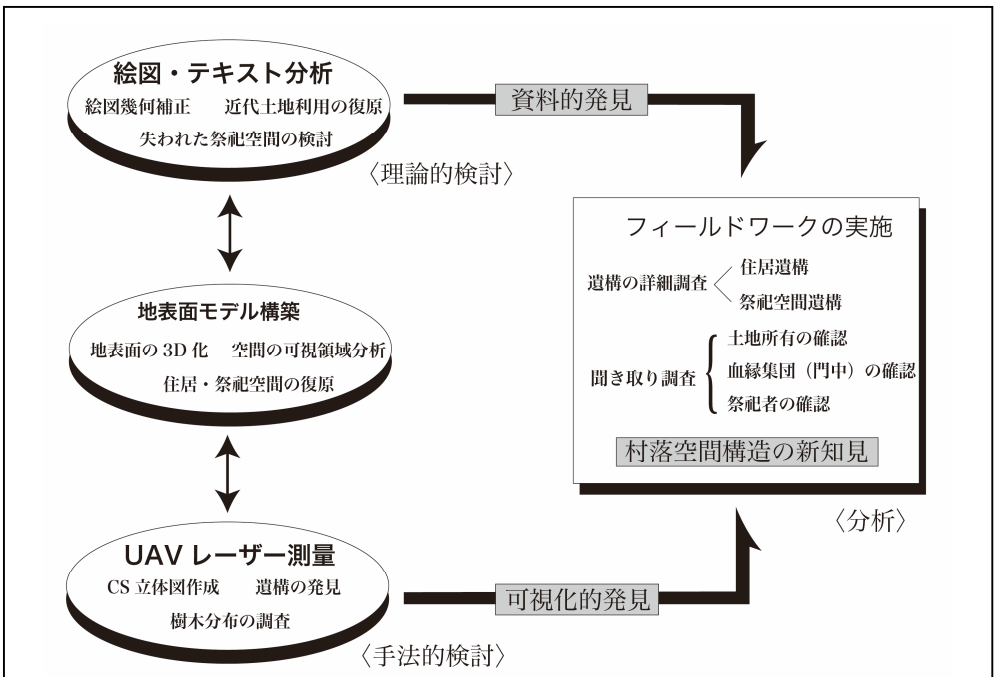

図１　調査・分析概念図

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 松井 幸一	４．巻 73
２．論文標題 村落祭祀空間および祭祀記録からの一考察 ： 今帰仁村謝名を事例に	５．発行年 2023年
３．雑誌名 關西大學文學論集	６．最初と最後の頁 171～181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32286/0002000682	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松井 幸一、楊 クン屹	４．巻 73
２．論文標題 集落研究における集合的記憶の活用 ： 沖縄県今帰仁村謝名集落を事例に	５．発行年 2024年
３．雑誌名 關西大學文學論集	６．最初と最後の頁 171～183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32286/0002001095	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 楊 クン屹	４．巻 3
２．論文標題 今帰仁村謝名における伝統的集落景観の構造理念	５．発行年 2024年
３．雑誌名 ジオグラフィカ千里	６．最初と最後の頁 545-569
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松井 幸一	４．巻 3
２．論文標題 ドローンレーザー測量を利用した琉球旧集落の一考察	５．発行年 2024年
３．雑誌名 ジオグラフィカ千里	６．最初と最後の頁 665-676
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 松井幸一
2．発表標題 ドローンレーザー測量を利用した旧集落復原の一考察
3．学会等名 人文地理学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 楊クン;屹・松井真一
2．発表標題 沖縄県国頭郡今帰仁村謝名における集合的記憶の構築―グループインタビューの 質的分析を通じて―
3．学会等名 日本地理学会春季学術大会
4．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松井　真一 (Matsui Shinichi) (00706989)	愛知学院大学・教養部・准教授 (33902)	
研究分担者	住田　翔子 (Sumida Shoko) (00722050)	立命館大学・産業社会学部・准教授 (34315)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	楊　クン屹 (Yang Junyi)	関西大学・文学研究科・博士課程後期課程 (34416)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関